「家庭欄」と“生活者”の視点

市 川 孝 一

A Comparative Review of “Home Column” of major papers 1985

Koichi Ichikawa

はじめに

本稿は，拙稿「『家庭欄』にみる生活の諸問題——新聞記事の内容分析を通して—」(1)及び(3)（『生活科学研究』第5集，第6集）の続編である。今回は今までとは少し違った観点から「家庭欄」の検討を行ってみたい。つまり，男性を含めた“生活者”という視点からの紙面作りがなされているかどうかという観点から三大紙（『朝日』『毎日』『読売』）の「家庭欄」を改めて見直してみようというのがそれである。（対象は1985年5，6，7の3ヵ月分）

こうした試みをしてみようと思ったのは，一つの新聞記事が直接のきっかけになっている。朝日新聞に「私の紙面批評」という欄がある。この欄で，ノンフィクション・ライターの沖藤典子氏がたまたまこんな疑問を呈していた。“女性は家庭欄をよく読んでいるが，男性の（特に中年期の）熱心な読者というのは，あまり聞かない。なぜなのだろう。”

続けて彼女は次のように言う。「『家庭』欄という呼称，これは，いまなお根強い家庭イコール女の社会通念に加担しているのではないだろうか。どうせ女の問題だから男には関係ない，とページを素通りさせてしまう。女と男が生き方や生活を考える欄としての位置づけを明確にする新しい言葉が求められる。」(1)

そして，「家庭欄」の現状に対しては次のようなコメントを加えている。——「家庭欄的内容が文化，社会面に出ていって彼らの関心をひくべきか，今の紙面の中に男の目をも引きつける内容を盛り込むべきか，各紙とも迷っている。特に朝日には悩み深しの感がある。」(2)

以上の沖藤氏の指摘は，「家庭欄」のそれなりに熱心な男性読者である筆者にとってはなかなか面白い指摘であったし，筆者自身が日頃考えていたことも重なる部分があったので，前述のような発想となったわけである。以下，上に述べたような問題意識に沿って見た場合，具体的に各紙の紙面構成にはどのような特徴があるのかを見ていきたいと思う。

朝日新聞の場合

先の「紙面批評」の直接の対象となった『朝日』の場合から見ていくことにしよう。『朝日』の場合は，曜日毎に紙面構成にきわめて明瞭な特徴が見られるので曜日を追って見ていく

ことが有効である。

月曜日　通常「家庭欄」は見開き2ページだが，月曜はいつもの2分の1のスペースの1ページである。記事の内容には特定の領域のもののみという限定はない。

火曜日　2分の1のスペース，つまり1ページ分はいわば「女性のページ」である。人によっては，“フェミニズムのページ”，“ウーマン・リブのページ”と呼ぶ人がいるかもしれない。ここには，働く女性が職場でぶつかるさまざまな問題，差別の現状をするどく告発して大きな反響を呼んだ「あした天気になあれ」という連載もの，同じく働く女性からのメッセージが盛り込まれた「女から女へ」というコラム，「女のインデックス」という小コラムなどがある。

水曜日　同じく2分の1のスペース（1ページ分）は，「教育・子ども」のページである。「学園だより」「こども図書館」「思春期」というレギュラー・コラムをはじめ，高校生までの子どもの，広い意味での教育関係のテーマが扱われている。また，「連載インタビュー」という長期連載コラムがあり，対象となった時期では，「子どものおしゃれ」「子どものふざけ」「高校生のアルバイト」というテーマが取り上げられている。

木曜日　木曜の2分の1スペース（1ページ分）は，いわば「男性のページ」である。特に注目すべきものは「男の腕まくり」というレギュラー・コーナーである。この欄には，男性がさまざまな家事（炊事，裁縫，日曜大工　etc.）に挑戦し，その奮闘のあり様が描かれているわけだが，それがそのままhow toの実用記事ともなっているユニークなコーナーである。まさに，“男子厨房に入ろう”の精神で，積極的かつ具体的に男性の家事分担・参加を促している点で，画期的である。例えば，6月27日掲載分では，「甚平」づくりまで登場しており，まさに“驚異的”なのである。その他に，「男のインデックス」，天野祐吉氏の「私のCMウォッチング」（CM批評）のレギュラー・コラムがある。

金曜日　金曜日は見開きページの「金曜ひろば」が売り物である。われわれが，生活上でぶつかるさまざまな問題にどう対処するかのヒントを与えるという性格のコーナーである。例えば，5月の例でいうと，「ホーム・パーティ」（5月3日）「結婚式のスピーチ」（5月10日）「忘れ物」（5月17日）「健康食品」（5月31日）というテーマが取り上げられている。

この「金曜ひろば」は同じスペースが月1回は「その時，この本」というコーナーになる。生活の中でぶつかる諸問題を，本を手がかりにして考えてみようという欄である。樋口恵子（評論家），渥美雅子（弁護士）のレギュラー出演者とゲストの対談形式で話が進められる。ちなみに，各月のテーマとゲストは次のようになっている。5月「離婚をどう考える」（黒井千次），6月「今ふうの結婚式とは」（多田道太郎），7月「戦争と女」（丸岡秀子）

土曜日　2分の1スペース（1ページ分）は「老人のページ」である。「マイペース」「一筆啓上」の二つがレギ

ュラー・コラム。前者は，老いてますます盛んという感じの市井の老人たちを写真入りで紹介する小コラム。後者は，中高年の人々の，あるいは老人をめぐる問題を扱った読者からの投稿欄である。5月と6月は，これに「華の園」というタイトルの高橋義孝氏のエッセイが連載された。その他に，このページには単発記事が一つずつ掲載されるが，これも老人問題関連記事である。

日曜日　日曜の2分の1スペース（1ページ分）は，いわば「教養のページ」という趣きである。「～さんと～をよむ（みる・きく）」というコーナーがメインになっている。専門家の案内で名作，名著，名画，名曲などの紙上鑑賞を行おうという試みである。これをちょうど補う形で，読者が投稿で読後感などを寄せる「よむ（みる・きく）」という小コラムがある。

以上，長々と詳しい内容紹介を行ってきたが，これによって朝日新聞の紙面作りの特徴が非常に明瞭な形で明らかにされたと思う。つまり，『朝日』の場合は，月曜を除く各曜日の2分の1のスペースを，それぞれ異なった性別や世代の読者向けの記事で統一した実に明快な紙面作りがされていることがわかる。性別・世代別の読者層のセグメンテーションが非常にはっきりと行われており，それにもとづいた紙面作りがなされているのである。『朝日』の家庭欄に関する限り，前記の沖藤氏の批判にあった，家庭欄＝女性（の読者）という図式は必ずしもあてはまらないのである。それどころか，結論を先に言えば，批判の対象になった『朝日』の「家庭欄」が，皮肉なことに他の二紙にくらべれば男性読者や各世代の読者への配慮が一番行き届いているのである。

もちろん，長所はまた同時に短所でもあり，『朝日』の「家庭欄」には，反面次のような批判もある。同じ「私の紙面批評」の中で天野正子氏（千葉大助教授）は，最近の新聞がやたらと分厚くなったのは，“新聞が，「これがある」というより，「あれがない」という読者からの批判に敏感すぎるためではないのか，不特定多数の読者の要求に万遍なくこたえなければという思い込みが強すぎる結果ではないのか”と一般的な批判を述べた上で，「家庭欄」についても次のようにコメントしている。

「(家庭欄には)……多彩なハウツー情報が満載されている。これなら年齢・家族構成・生活関心がちがっても，読者のだれもが自分の暮らしに役立つ情報に，ひとつくらいは出合えるわけである。これで確かに読者からの『あれがない』という批判からは免れることができるだろう。しかし，それにかわって紙面からは『これがある』という，いわば情報の送り手側の『主張』が聞こえにくくなったのではないか」(3)

読者の多様な要求に対応した紙面作りも大切だろうが，同時に，情報の送り手側の視点や主張を明確にすることが必要だと，その“総花的”な紙面作りを批判するのである。天野氏は「家庭欄」に“決まりきった日常の暮らしにゆさぶりをかけ，それを見直させ，考えさせる生活への新しい視点や提案”を望むわけだが，とりあえずはまず，女性（主婦）以外の読者の目も向けさせようという「家庭欄」の現状では，やや高度すぎる要求であるような気もする。（この点では，むしろ送り手・作り手の側に同情してしまう。――筆者は心優しい読者なのである。）

毎日新聞の場合

次に，毎日新聞の場合はどうか。『毎日』の場合は，木曜日と金曜日だけが特別の紙面構成となっている。

木曜日　2分の1のスペース(1ページ分)が〈みんなの教育〉という特別ページにさかれている。そのタイトル通り，教育・子ども（児童）の問題が中心に扱われている。「教室から」と「すきな先生・きらいな先生」という二つの小さなレギュラー・コラムがあり，今回の対象となった期間では，「かしこく育てる」という長期連載ものが大きなスペースをとっている。

金曜日　「家庭欄」の各1ページずつが，〈健やかに〉と〈住まいを考える〉という特別ページに割り当てられている。前者は説明するまでもなく「健康のページ」である。読者からの質問に専門医が答える「あなたのカルテ」というのが，レギュラー・コラム。この時期はその他に「がん謎ときの旅」という連載ものが入り，残りを健康関係の単発記事一つが占める。

後者は，そのタイトル通り，「住」の問題を扱った特別ページである。ここにもレギュラー・コラムとして，読者からの不動産を中心とする住宅問題に関する相談に答える「相談カードから」がある。その他には「DIY（Do it yourself）を楽しく」というコラムがあり，日曜大工的な住と趣味との接点に位置するような問題が扱われている。

以上のように，『毎日』の場合は，一週のうち，木，金だけは特別の紙面構成になっているが，前述の『朝日』のように性とか世代による読者層のセグメンテーションにもとづいた明快な紙面作りは行われていない。他の二紙に比べて，連載記事の種類も圧倒的に多く，きわめて“多種多様”であるが，同時に“雑多”な印象は免れない。

上にあげた，「住」のページや，「健康のページ」にはもちろん男性の読者にも関係のある記事は少なくないが，特別男性読者の目を向けさせようという工夫はされていない。また，「トーク老い」や「わかりやすい年金学」などの連載ものは，福祉や老人問題を扱ったものではあるが，これらも他の記事と“雑居”しているのでそれほど目立った強いインパクトはない。

総じて，『毎日』の「家庭欄」はこうして見てくるかぎり，ベースとしては，女性の読者，それも主婦層を中心とした読者層を想定した紙面作りになっていることがうかがわれる。

読売新聞の場合

最後に，読売新聞の場合を見ておこう。『読売』の場合，曜日による特別紙面は，木曜日の〈木曜ワイド〉という見開きページ，と月曜日の〈家庭・子ども〉という2分の1スペース（1ページ分）の二つである。（火曜日の1ページ分も「働く女性のページ」といってもいい）

前者，〈木曜ワイド〉は，『朝日』の「金曜ひろば」にあたるものである。取り上げられているテーマは，「金曜ひろば」よりも広く，例えば，「アイドルは今――“元気な女の子”の時代」（6月27日）から，「東京に息づく干潟の世界――夏休み絶好の自然観察地」（7月25日）に至るまで，非常に雑多である。また，この〈木曜ワイド〉には月一回の投書特集があり，各月の特集テーマとしては，5月―「子供のしつけ」，6月―「おやじ」，7月―「贈答」といったものが取り上げられている。

後者の〈家庭・こども〉では，「ふれ合い」という写真コラム，「すくすく育児メモ」「母と子の図書館」がレギュラー・コラムで，残りを，子ども関連の単発記事一つが占める。

今ふれたように，『読売』の場合は，曜日による紙面構成の違いというのはそれほどないということになるが，『読売』については，そ

の最大の特徴として，「家庭欄」の“標題”のことを話題にしなければならないだろう。

『朝日』，『毎日』の場合は，「家庭欄」の標題は文字通り，“家庭”である。ところが，『読売』の場合の「家庭欄」のそれは，“婦人とくらし”となっている。——少なくとも，そのタイトルに関する限り，『読売』は，生活＝主婦＝家庭婦人という“古典的”図式をかたくなに（!?）守っているのである。

やや話は横道にそれるが，この「婦人」という名称に関しては，こんなエピソードがある。日本社会学会の大会発表はそのテーマに応じて，いくつかのセクションにわかれて発表が行われる。「基礎理論」「家族」「都市」「階級・階層」等々といったようにである。こうしたセクションの一つに今まで「婦人問題」という部会があったのだが，1985年の学会からそのセクション名が「女性」に改められたのである。女性だけを特別に扱うテーマ部会があること自体がすでに“差別”であるという，フェミニストたちの抗議があり，セクションの廃止までには至らなかったが，とりあえず名称の変更ということで妥協した結果らしい。

そういうことでいえば，“婦人”ということば自体に，“差別的”なニュアンスが含まれているということになる。ところが，最大の発行部数を誇る大新聞が，「家庭欄」に堂々と（!?）そうしたタイトルを掲げて平気だというのも面白い現象であるといわなければならない。(4)

いずれにせよ，『読売』の場合は，「家庭欄」の読者として，女性を正面に押し出している。もちろん，『読売』の「家庭欄」の場合も，「健康」や「趣味」「住」に関する記事などで男性読者に関係のあるものがないわけではないし，「ただいま求職中」という長期連載ものの中にも男性にむしろ深いかかわりのある問題が多く扱われている。

しかし，他の二紙，とりわけ『朝日』に比べれば，“女性”を前面に出したものが目立ち，男性読者を想定したものは少ないといっていいだろう。レギュラー・コラムや連載ものを見ても，「女の詩・おんなのうた」「女性ライブラリー」「働きたいあなたへ」「working woman 内外事情」といった形で女性読者のみをむしろ積極的な訴求対象とした記事が少なくない。

もちろん，この程度の特集ものでは，他紙との違いがはっきりしないと思うので，ここでは，一つ具体的な例をとりあげてそれを明らかにすることにしよう。

1985年は，“国連婦人の10年”の最終年にあたり，その締めくくりとして7月にケニアのナイロビで，「世界婦人会議」が開かれた。当然のことながら7月になると，この「世界婦人会議」関連の記事がタイムリーなトピックスものとして目立つようになるわけだが，この扱いが三紙では大きく異なっている。

『朝日』の場合，「なにが変わったのか」（9回シリーズ，5月）と「広場の女たち　NGOフォーラム'85から」（5回シリーズ，7月）という二つの特集記事はあるが，7月の家庭欄に関する限り，単発記事52のうちに，この会議に関した記事はゼロである。

『毎日』の場合は，“国連婦人の10年”とサブタイトルのついた，「しなやかに挑戦」という長期連載が，5月から7月にかけて，12回分あるが，7月の単発記事69のうち，婦人会議関連のものはわずか一つである。

これが，『読売』になると前の二紙とは明らかに違っている。「世界の女性たちは今」という連載ものが，6月から7月にかけて，18回続くのに加えて，7月の単発記事47のうち，婦人会議関連のものが約5分の1強の10例に及んでいる。この一例からも，『読売』の「家庭欄」が，いかに“婦人もの”にウエイトを置いている（“婦人もの”に強い！）かということの一端がうかがわれるのである。

もちろん，これだけでは，特殊なトピック

の場合の特殊なケースにすぎないだろうという疑問や批判が出てくると思うので，もう一つ別のケース（レギュラー・コラム）を取り上げて，読売の「家庭欄」が，いかに“女性志向”が強いかということを示してみよう。

『読売』の「家庭欄」には，「人生案内」という読者の人生相談のレギュラー・コラムがある。こういう形の人生相談を現在残してしるのは三大紙では『読売』だけである。悩みのあるのは，何も女性だけには限らないだろうが，この「人生案内」に登場する相談者は，ほとんどすべてが女性なのである。

例外的に登場する男性相談者は，5月で26名中4人，6月で24名中4人，7月は27名中2人である。ここで，話題はまた横道にそれるが，この10名の内訳を見ると極めて顕著な特徴を示していることがわかる。この10名のうち20代と30代の男性2人を除くと，それがいずれも60代以上の中高年の男性によって占められているのである。

しかも，その相談内容に驚くべき類似性が見られるということに気がつく。「老いの悲哀？男60歳——無い無いづくし，気も狂いそう」(5月2日)，「孤独で寂しい変わり者——人の話の中に入っていけない。61歳・無職」(5月8日)，「行く末に悩む無職60歳——唯一の身寄りに迷惑をかけたくない」(5月17日)「今も共同行動が苦痛——年金で独り暮らしの62歳男性」(6月17日)というのがその具体的な相談内容である。いずれも孤独な老人男性の不幸を嘆いたものである。

残りの，4件も非常に類似性が高い。「長男が人妻に恋，同居——結婚許さず，田畑継がせたいが」，60代男性(5月11日)，「パチンコに狂う娘の夫——生活苦しく，私に意見してというが」，60代父親（6月12日）「金貸さないなら絶縁——脅す長男に，養子も考える年金夫婦」，65歳父親（7月11日），「婚期前の孫娘に不安——家事いやいや，修養必要か」，21歳の孫娘を持つ祖父（7月13日）これまた，いずれも，異世代の親族に翻弄される老人の悲哀を訴えたものである。

かつて，社会学者の見田宗介は，人生相談の内容分析を通じて，“不幸の諸類型”を見事に分析してみせたが(5)，今日の不幸の類型の一つの典型的パターンは，老人男性の孤独及び悲哀ということになりそうだ。(もちろんこのような小数のサンプルからのみ断定はできないが……) ——本論からは脱線したが，その内容が非常に興味深いものだったので敢えて深入りした。このテーマは改めて，別の機会に取り上げてみるだけの価値がありそうである。

まとめ

以上，『朝日』『毎日』『読売』の三大紙の「家庭欄」をその紙面構成，紙面作りという点に注目して見て来たわけだが，各紙のそれぞれの特徴はある程度明らかにできたと思う。

朝日新聞の「家庭欄」に「くらべてみたら」という商品テストの結果を紹介するページがあるが，それにならっていうなら，この小論は新聞の「家庭欄」という“商品”を対象にした私なりの「商品テスト」の結果のレポートである。

かなり，独断も入った雑感風エッセイになったが，冒頭に述べた，男性も含めた“生活者”という視点からの紙面作りという観点から見ると，総花的という批判はあるが，『朝日』に軍配が上がるといえそうである。『読売』は，女性読者にターゲットを絞って，そこに居直って(!?)いる点が，欠点であると同時に強味にもなっている。『毎日』は，記事数も多くバラエティにも富んでいるが，反面“雑然”としている。——こんな風に三紙の特徴をまとめることができそうである。

いずれにせよ，「家庭欄」は今後“暮しのページ”，“生活のページ”として発展していかなければならないだろう。月並みな結論かもしれないが，われわれ読者が求めるのは，そ

こにどんな名称が与えられようと，それが，生活の哲学やくらしの智恵に裏打ちされた，生活者にとって本当に必要な，ことばの本来の意味での“生活情報”の提供の場となることである。(6)

注

(1) (2) 沖藤典子 “家庭欄，男にもパンチを”「私の紙面批評」，『朝日新聞』，1985年9月22日朝刊

(3) 天野正子 “視点や主張を明確に”「私の紙面批評」、『朝日新聞』，1985年5月5日朝刊

(4) ある意味では当然のことかもしれないが，主婦を中心とした女性読者には『読売』の家庭欄の評判は上々だそうである。

(5) 見田宗介「現代における不幸の諸類型」，北川隆吉編『疎外の社会学』，有斐閣，1964

(6) 今まで「家庭百科」「女性百科」などの名称で出版されていた実用百科事典が読者層を男性までに広げた「生活百科」として相次いでモデルチェンジされているという。(「イメージ一新生活百科—女性専科の枠破る」『朝日新聞』1985年5月12日日曜版) これなども新しい「家庭欄」の方向を示唆しているといえよう。